

# 治安維持法

## 熊本県本部



熊本県版

No. 247

治安維持法犠牲者  
国家賠償要求同盟

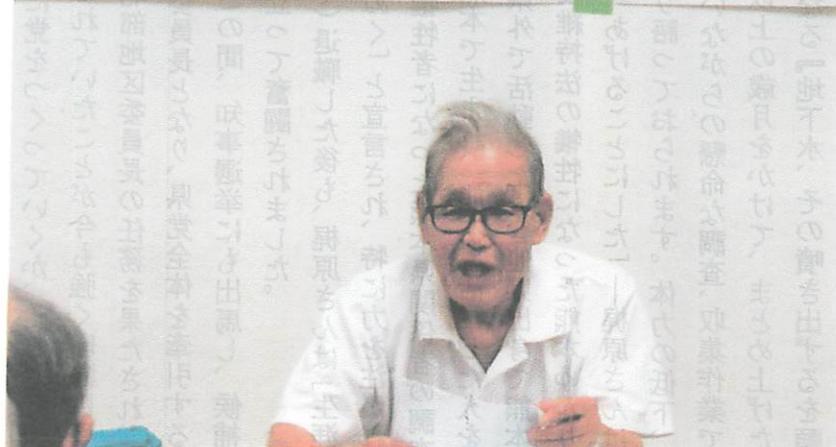
熊本県本部

〒862-0954

熊本市中央区神水

1-30-7 コモン神水

☎096-381-1807



2018年県本部総会 改訂版に向けて講演をする梶原氏

### 運動の基本

- 一、 治安維持法体制の復活に反対する。
- 二、 国は戦前の治安維持法が人道に反する悪法であることを認めること。
- 三、 国は、治安維持法の犠牲者に謝罪と賠償を行うこと。

### 追悼

#### 梶原定義さんを偲んで

元日本共産党県委員長 久保山 啓介

ご逝去を悼み、謹んでお悔やみ申し上げます。永い間の献身的な活動、本当にご苦勞さまでした。心からの敬意と感謝を申し上げます。

私が梶原さんに最初にお目にかかったのは今から59年前、入党した20歳のときでした。入党し、職場（労金）の細胞会議（現在は名称が「支部」）に毎回緊張して参加していましたが、北部地区委員長をされていた梶原さんが指導にこられたことがあります。私にとってはそれが最初の出会いでした。以来、時々、細胞会議に直接参加して、援助指導をされてきました。「革命運動の主力部隊は労働者階級、よって、いかに職場に強大な党をつくるか、広大

な空白の職場にいかにか党をつくっていくか、それが最大の課題だ」—そう力説されていたことが今も強く印象に残っています。永い間、北部地区委員長長の任務を果たされ、その後は県委員会の副委員長となり、県党全体を牽引する先頭に立たれました。この間、知事選挙にも出馬し、候補者として闘いの先頭に立って奮闘されました。

県委員会を(定年で)退職した後も、梶原さんは「生涯、一党員として頑張りぬく」と宣言され、特に力を注がれたのが、治安維持法の犠牲者になった熊本県関係者の調査、収集活動でした。「熊本で生まれ、熊本で活動した人をはじめ、熊本出身者で県外で活動した人、他県出身で熊本で活動した人など、治安維持法の犠牲者になった熊本ゆかりの人を判明したかぎり、あげることにした」—梶原さんは発掘、調査の目的をそう語っておられます。体力の低下、幾つもの持病とたたかいながらの懸命な調査、収集作業でした。そして、15年以上の歳月をかけて、まとめ上げたのが総数308人からなる『地下水、その噴き出するを願って—熊本の治安維持法犠牲者、その名簿と足跡』の発行です。本を読んで、名簿で私を知っている人は西里竜夫さん、平田宗男さん、福田政雄さんなどごく少数で、大半の方は初めて聞く大先輩の方々です。過酷な弾圧のもとで、侵略戦争反対、主権在民の旗をかかげ、不屈に闘いぬかれたこ

れら大先輩たちに改めて、心からの敬意と感謝をささげたいと思います。

梶原さんの本では「資料編」として、治安維持法年表(世界・国内・県内の動き)も紹介されていて、熊本県内での闘いの歴史を学ぶうえでも大変貴重な資料となっています。



歴史的にも高く評価される大仕事をやりぬかれた梶原さん、その遺影に向かって、「志をしつかり受け継ぎ、頑張ります」との誓いを新たにしたいと決意しています。

2020年

コロナ禍の中

ささやかな出版祝

## 梶原定義さんを偲ぶ

八代市坂本町 内田次一

私が梶原さんにお会いしたのは、数年前に、熊本市民会館で開かれた「日本共産党演説会」でした。演説会が終了し会場を出たところで、近くを杖をついて歩いておられる梶原さんに気づいて「梶原さん」と声を掛けたら「おうーうっだ君か」と声をかけていただき、互いに「ハグ」したことを思い出します。

それが梶原さんとの最後になりました。

なぜ、私が梶原さんと「ハグ」し合うような関係なのか。それは、今から48年前（1974年）私が20代の青春時代に、人吉球磨地域で、県企業局職員として仕事をしながら、一方で、民青同盟の活動で地域の青年運動に参加していました。7月参議院選挙で、日本共産党の候補者のピラ配付や演説会の案内をしていた時に、戸別訪問の疑いで公選法違反として突然、逮捕され、多良木署で取り調べを受けて、人吉警察署に留置されました。その時、「不当な選挙弾圧」だとして、国民救援会熊本県本部から、梶原さんをはじめ数名の方が支援に来ていただき、警察権力への抗議とともに、今後の闘い方や裁判闘争について親身になって、指導してもらいました。大変心強く思いました。7

0年代は、革新勢力の上げ潮の時代で、自民党政権は、共産党の前進を抑えるため、全国的に「選挙弾圧」がされ、日本国民救援会が、そのたたかいの先頭に立って支援活動をしていました。私は、「選挙弾圧事件全国交流会」に参加し、公権力の本質がわかりました。

当時は、5当3落と言われて、金権・買収選挙があたりまえでした。そんな中で、候補者の政策を宣伝し、演説会を案内することが、公選法違反で逮捕されるなど、民主主義の社会では、ありえないことです。

この闘いの中で、私自身の人生観も変わり、「真面目に生きるものが報われる社会」を実現するために、政治を変えたいと思い、職場を退職し、職業革命家への道を選びました。共産党の指導の下に活動する民青同盟の県専従者になりました。梶原さんは、その共産党熊本県委員会の財政責任者でしたので、財政力の弱い民青同盟へ、財政的支援もしていただきました。

梶原さんは、私の人生を大きく変えた「選挙弾圧事件」の闘いで、未熟な私を親身になって指導・援助し、暖かく見守っていただいた尊敬する人でした。お会いした時に「ハグ」したのも、その感謝の思いからです。「うっだ君」という梶原さんのやさしい声が聞こえてきます。ありがとうございました。安らかに、お眠りください。

## 梶原さんと西里精さんの思い出

多田 正子

梶原さんが亡くなったとのこと、それほど親しかつたわけではないが、人が亡くなると、急に思い出すことが多くなって、とても寂しい気持ちになる。

以前書いたことがあるが、私は2013年上海の（ソルゲと上海情報戦の国際学術会議）に参加した。知識はないが、上海へ行って見たいと思ったからである。その時、銭明（景若南）の娘・景雲さんと知り合いになった。銭明というのは、かつて日本の中国侵略を防ぐべく西里竜夫らと上海で共に闘った戦士である。中国建国後、そうした情報関係の者はみな日本のスパイとして逮捕され、文革終了までという長い年月を労働改造などの暗い生活を余儀なくされた。

帰国後メール往来の中で、景雲さんから西里の（革命の上海での中文版を出したいので、遺族の許可をとりたい、と言ってきた。それで考えて、熊本の共産党本部にあたる、と、梶原さんに聞くようにしたのであった。

梶原さんに電話した時の第一声は「どうして、西里のことを？」というのであった。経緯をはなすと、快く西里の長男・精さん（水墨画家）の住所を教えてくださいました。―のち、

精さんからも快諾がきて、2016年中国語版が出た（政府の許可が下りないので、香港から自費出版とのこと）。

それから西里精さんと梶原さんとの文通とが始まった。精さんには戦後中国の同志達との交流について、何度も質問、教えてもらった。自分が西里竜夫という活動家の長男であることをよく自覚している感じがした。とても字の上手な、本当に率直な気持ちのいい方であった。都内で山水画の講習会をいくつかして、その発表会に呼ばれたことがあり、その時初めて会った。すらりとしてハンサムな方、父親似なのだろうか、と思った。東京都美術館での立派な展覧会も見に行った。絵の数があまり多くて精さんの絵の場所が分からず、聞くと、「ああ、西里先生ですね」とすぐいわれ、驚いたことがある。《追憶》という阿波踊りの絵で、総務大臣賞であった。こんなに立派で感じよく子供の絵をよく描く人が、なぜずっと独身だったのだろうと思ったことがある。

梶原さんは西里の下で共に働いて来た方だったので、西里のことをいろいろ教えてもらい、彼の本も梶原さんの作品も、みな頂いた。また82年に西里が元同士を訪ねようとしたときの状況も、当事者として教えて頂いた。当時はまだ日中共産党の関係回復前だったので、党にいた西里の訪中は大変だったのである。

当時梶原さんは（地下水）の再版準備中で図書館に行くのが不便だというので、私が東京の東洋文庫、千葉県立図書館へ行って、資料をコピーして送った。千葉県立図書館は、驚いたことに、治安維持法関係の資料はほぼ完璧にそろっているのだった。（思想月報）で熊本の本森トラという新興宗教で検挙された人のことを見つけた時、梶原さんは「全く知らなかった！ずっと隠されてきたんだ、当時はそういうことは不名誉なことだったから」と言われた。——そうした過程で、梶原さんから教えて頂いたこと、資料探しで学んだことは山ほどある。

精さんは2018年暮れ、癌で亡くなった。亡くなる前も、とても率直に病状を教えてくださいました。まだお元気なうち、大きな立派な絵を額入りで、梶原さんに贈ったと聞いたことがある。父の同志にということだろう。（ずっと前、お墓をつくる時も、兄弟3人がみな東京だから、東京につくっていいだろうか、それとも熊本にすべきだろうか）と迷って、梶原さんに相談があったそうだ。梶原さんの言で、お墓は東京八王子になったという。

上海の景雲さんからは西里竜夫が生前銭明のところへ送ってきたという手紙のコピーをもらっている。景雲さんは私よりずっと若いので、そのうち精さんからもらった手紙、賀状などはみな景雲さんに送って保存してもらおうつも

りでいる。

精さんが亡くなった後、多くの絵が梶原さんのところへ送られてきて、熊本の美術館に所蔵を依頼していると聞いたが、それはどうなったのか、梶原さんもお体がだんだん弱ってきたので、そのままになったかもしれない。

机の上に『改訂版 地下水』があり、表紙は西里精さんの絵、内容は梶原さん——。

梶原さんは熊本地震で家はやられたものの御本人は無事、運の強い人と、いつも思っていたが、もういなくなってしまうた。人はみな去っていく。精さんはほぼ私と同年だったのに——。梶原さんは96歳、天寿を全うしたとはいえ、とても寂しい、ずっといてくれたらいいのに、と思うのである。

2012年

故西里竜夫さん

没後25周年の集い



## 祖父が愛した「熊本」に感謝

石川 翠

エリザベス女王と同じ96歳で祖父が亡くなりました。22年前に祖母は他界しており、一人娘の母は京都、ただ一人の孫である私は兵庫に住み、祖父は長らく益城町で一人暮らしをしていました。

「じいさんながら、末っ子体質で人に頼るのがうまい」。母は祖父のことをこう評していました。確かに、聞き上手で優しい性格だったこともあり、ご近所や勉強仲間、ヘルパーさんなどさまざまな方が助けてくださいました。

特に、15も年下のお隣さんは、祖父の家が全壊になった熊本地震の時に、ともに車の中に避難させてくれ、その後も壊れた家具の処分や庭の手入れなど、事細かに世話を焼いてくれました。その無償の心遣いに驚き、地域のつながりの深さを実感しました。避難生活を終えた祖父が、益城に戻りたいという希望も、お隣さんがいるということが大きな理由だったようです。

葬儀で、お隣さんが涙を浮かべて花を手向けてくださる姿を見て、私も涙が出ました。自分が将来どこかの地でここまでの関係性を築けるだろうか、祖父をうらやましく思いました。

地震をきっかけに熊本に足を運ぶことが多くなりましたが、もう訪れる機会がなくなるんだな、と思うと寂しくなります。でも、4分の1は熊本の血が流れていると思うと誇らしくも感じます。お隣さんをはじめ、祖父を通して熊本の温かい部分に触れ、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございます。（熊日10月26日読者欄より転載）

## 梶原さんの志を抱いて

国賠同盟熊本本部事務局長 関根 隆

梶原さん、安らかに眠りください。

梶原さんは私にとって第3の親父であり、人生最後の師と呼べる人でした。

梶原さんの人生の4分の1、私の人生の3分の1は治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟の活動の中で生きてきました。私はここで梶原さんからいろいろなことを学ばせていただきました。

梶原さんとの出会いは、妻が働き始めた県委員会に呼び出され、国賠同盟の活動を手伝ってもらえないかと声をかけて頂いたことからです。その時は、権力と対峙している党の県本部に入り、しかも活動歴豊富な方とお見受けし、

大変緊張したのを思い出します。私は、後で問題になってはいけないと思い、語れる範囲で若い時の活動経歴を語りました。梶原さんはじつと話を最後まで聞いて、「わかりました。今は何もしてないんだったら、手伝ってくれませんか」とおっしゃってくださいだったので、私も快くお引き受けしました。

後で知ったのですが、同盟県本部は結成時のメンバーが相次ぎ亡くなり、活動が停滞し、立て直すために梶原さんが中心になって動いていたようです。当時の中心メンバーは共産党の錚々たるメンバーで40代の私は教えられることばかりでした。若いことだけが取柄で何処へでもついていき、梶原さんや各県の活動家と面識を持ちました。梶原さんの元気な時は九州ブロックの会議のたびに一緒に、話をしました。

梶原さんは、熊本地震のころから施設や入院を繰り返すようになり、コロナのまん延がそれに追い打ちをかけ、なかなか会えなくなりました。ゆっくり話せたのは、2年前『地下水』改訂版出版のころでした。梶原さんは「生きていくうちに改訂版を出せてほっとした」としみじみ語ったのを思い出します。そして梶原さんに「次に続くものに伝えたいことは何でしょうか」と私が尋ねたら、梶原さんの答えは、「伝えるなど私の立場ではおこがましくて・・・」

としばらく考えた後「ただこの年になって原点に戻らなければという思いが強くなっていく」といったのが心に響いています。

また原点ということに関連するのですが、私が10代後半から20代の活動経験をどう総括するかで悩んでいるとき、梶原さんや当時の同盟の主要メンバーのいわゆる『50年問題』が似ているように思えて、ずいぶん伺ったものです。しかし肝心のどう乗り越えたのかは多くを語りませんでした。しかし梶原さんの温かいまなざしを通して感じたのは若いころの経験や思想を全否定してはいけないということでした。

梶原さんは死ぬ間際まで資本論を手放さず、真理探究の姿勢で亡くなりました。人生とは何より自己革命であり、革命とはすべてその途上を生きることにあると思います。

ちようど人類史を長いバトンリレーに例えれば、人類が減じるまで最終走者はいません。私たちは前の走者からバトンを受け取り、生きていく限り走り続け、次の走者に少しでも前に進んで手渡すだけです。私も梶原さんから確かにバトンを手渡されました。梶原さんの屍を踏み越えて前を走ります。

本当にお疲れ様です。ありがとうございました。



九州ブロック会議 2003年熊本にて



2008年、遺族とともに



2011年、顕彰ツアー



2018年、県本部総会の打ち上げ



2005年、九プロ大分 都留さん宅にて